

とよなか

(部内資料)

子ども達の豊かな成長・発達の力を
ために皆で力を
合わせましょう！

教え子を再び戦場に送るな！ 2017年3月14日発行NO. 578

職場復帰の希望かなわらず

今年も「保育園落ちた」人が全国で続出

今春からの職場復帰を希望していた豊中市の教員がわが子が保育園に入園（大阪市）できず、育休を延長せざるを得なくなり、

この方と同様に職場復帰できなかった人が昨年度5名超おり、この春も何人か出てくると予想（市教委）しています。

《手記》

第何希望の保育園になるかな…。ドキドキしながら封を開けると、保育園の名前はな

かできませんでした。上の子の育休中に下の子を出産したため、私の育休は3年

く「保留」の文字が。一瞬間のことなのかわかりませんでした。我が家は単身赴任の加

点があったため、保留になることは想定していなかったからです。通知を持つ手が震え

ました。1歳と3歳になる子ども二人を同じところに入所できるよう希望していました。

我が家の近辺は7時半からの預かりしかなく、同じところに入れない場合は1時間目の

始まりに間に合わないからです。知り合いから、加点を稼ぐ

ためにお母さんたちは色んな対策をとっていたことを聞き、自分のリサーチ不足を悔やみ、

ただただ自分を責めることし

ていました。しかし、認可外がなぜ認可

されぬ。だからといって、二次募集で入れる可能性は限りなく低い。眠れない日々を過ごす中で、私の「何としてでも働きたい！」という気持ちほどんどん萎えていってしまいました。

何よりも大切なのは、わが子たちが安全に楽しく過ごせること。

悩みに悩んだ末、育休を延長するという選択をしました。結論は出たものの、気持ちはすっきりしないままでした。

育休を延長するということは、待機には当たらないので次の申請時に何の加点にもならない。しかもまだ一年無収入。退職金にも昇給にも影響が出てくるのではないかと。直前で延長を言い出してしまい職場にも迷惑をかけてしまった。

何よりも働きたいのに働くことができない。悲しみや怒りがふつふつとこみ上げてきました。役所に申請の取り下げに行

ったときに、この育休延長は本意な延長だという私の思い

を伝えてきました。すると役所からは認可外を進められました。「子どもの安全の保障もできないようなところに大事な子どもを預けるといいますか！」と怒りが爆発しました。

とても辛い日々でしたが、私は育休延長という選択があつたからまだ良かったのかもしれない。保育園に落ちたお母さんたちの中にはもつともつと深刻な状況の方もたくさんいらっしゃいます。加

点競争をしなければ保育園に入れない。保育園に入れたお母さんたちの中には「勝ち抜いた！」という表現をする人もいます。働きたいという思いを持った全てのお母さんが、安心して子どもたちを託せる認可保育園をもっと増やしてほしい。保育園に入るために加

点争いをしないといけないようなあり方はとてもおかしいことだと私は思います。

安全 安心に
預けられる



保育園の
拡充・充実は
最優先課題！

インド・ラダックへの道(4)

小曾根小 綱島 典子

だらだらと続いた連載もいよいよ最終回である。ここまでお読みいただいた方々の多くは「ラダック地方にはダライラマとチベット寺院しかないのか。」とお思いだろう。いやいや、それだけではない。ラダックの主な街、レーは標高約三五〇〇mにある。これは富士山の8・5合目にあたる。つまり空港に降り立った瞬間から高山病との戦いが始まるのだ。

じつとしていけると大したこととはないが、動く途端に不調になる。初日、宿から300m程歩くと胸に熱いものがこみ上げてきた。胃の中に入っていたものたちを道端から母なる大地に帰してあげることにした。さあ、広い世界へ帰って行くのだよ:ああすつきりすつきりしたので心置きなく絶景を見に行くための現地ツアーを申し込むことができた。目的地は標高約4300mにある湖。中国・チベット地方との国境にあり、インド映画のロケ地にもなっている。それはぜひ見たい。片道5時

間かかるけれど、だがしかし、ここでさらなる問題が。

ラダック地方には高い山々が連なっている。どこかへ行くと思うと必ず峠を越ねばならない。レーが3500mだから当然それ以上の高度だ。今回の旅では自動車を通れる世界最高地点にある、5600mの峠を越えた。

5600mだー、などと浮かれている場合ではなかった。とにかく空気が薄い(平地の半分以下)。わずか数十mを歩くのにも息は絶え絶え、峠の茶屋(よくこんな所で店なんかやってくれるもんだ)でトイレを借りようものなら、しやがんだ瞬間に目の前は真っ白になる。トイレと言っても地面に穴が開いただけなので、排泄物と穴に気をつけながら用を足す。用を足しながら頭に浮かんだのはただひとつ、



車が通れる世界最高地点の峠

「こんな高度で登山できるイモトアヤコすげー」だった。

ともかく、苦しい思いもしながらたどり着いたその先には、雪をかぶった山々に囲まれた湖が待っていた。空気が澄んでいるので、空がとても近い。太陽が顔を出すと、青空を映した湖面がコバルトブルーに輝いて、それはそれは美しい。

ひとしきり湖を堪能してからまた5時間かけてレーへ帰る。そんなこんなで1週間あまりラダックに滞在した。人間の体というのはよくできたもので、当初ひどかった高山病も帰る頃には「2km位なら走れるんじゃないか?」と思うほどフツーに過ごせるようになるのである。(おわり)



標高4300mにある湖、パンゴン・ツォ

「21世紀にふさわしい教育を」 「部落問題学習」を考えるQ&A

大阪教育文化センター「部落問題解決と教育」研究会

Q10 地域フィールドワークはどうか。どう考えればよいですか。

A10 ここが「部落」、A10 「同和地区」という誤解を育てます。

フィールドワークと称して行政や研究団体、学校が、なにも知らない人を連れて来て、ここがかつての「部落」「同和地区」だと教えています。現地へ行ったところで、他の地域となんら変わることはありません。大阪府の調査でも生まれた時から住み続けている人は約1割。住んでいるから差別されるようなことはありません。

もうそんな時代ではないのです。住んでいる人の思い、「私たちの町を『ここが部落』と言う視線で見ないでほしい」、行政が人を連れて見に来るのはもうやめてほしい。「私

たちをさらしものにしなさい」という思いは無視されています。

フィールドワークで見ただけでは何もわかりません。とすれば、現地でも聞く話がメインになりません。そこで話す人は肩書きが何であっても結局は部落解放同盟(解同)の立場にたつ人です。

大阪では行政はそういう人しか講師に選びません。

逆に言えば、部落解放同盟の支部のない地域では、フィールドワークなどとして「ここが同和地区」と見に来ることなど地域住民が歓迎しないし、認めないのです。

21世紀になって15年以上経つのにまだ続けていることは、大阪の行政の歪みを示しています。

子どもたちに「ここがかつて部落だった」と語り継ぐことはやめましょう。